

大川小で教員ら学ぶ

宮城・石巻 文科省が初研修

文部科学省は26日、東日本大震災で児童74人と教職員10人が犠牲となった宮城県石巻市の震災遺構・大川小学校で、学校防災を主導する立場の全国の教員らを集めた「学校安全指導者研修会」を初めて開いた。90人の参加者は、多くの命が失われた現場で遺族から教訓を学び、子どもらの命を守るため平時に何をすべきかを考えた。

研修会は、学校安全の向上を目的に文科省が企画し、42都道府県の幼稚園、小、中、高校の校長や教員、教育

委員会の担当者らが参加した。同小を巡っては、児童遺族らが市と県の責任を問う民事訴訟を起こし、仙台高裁は、震災前の想定に基

づき求められていた水準の事前防災を学校や市教委がしていなかったとして組織の過失を認定。文科省は判決確定後の2019年、判決に沿って学校防災体制を見直すよう、全国の教委に通知した。案内した元中学教諭

で遺族の佐藤敏郎さん(59)は「判決はあの日の校庭の先生を責めていない。あの日までになんかできなかったか」と事前の備えの重要性を強調。災害発生時の対応は「『念のため』のギアを早く上げるしかない」と訴えた。



大川小の被災校舎前で、遺族の佐藤敏郎さん(手前右)の話に耳を傾ける「学校安全指導者研修会」の参加者たち—宮城県石巻市で

参加した和歌山市立安原小学校長の西畑徹さん(59)は「訓練をきちんとしないと実践に結びつかないことを改めて学んだ」と語り、佐賀県教委の碓竜治さん(46)は「命の尊さを感じた。教委として、学校が防災に前向きに取り組めるようにし、子どもたちが命について考える機会も増やしたい」と話した。

【百武信幸】